
冬の悪魔

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の悪魔

【Nコード】

N0056K

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

四人の旅人する神が季節を運ぶ世界。一国の策略により恵みの春と実り秋を失ったその他の国々は、夏と冬だけを繰り返す死の世界。そんな世界で眠りを司る死神、冬の悪魔と出会った少女。夏の悪魔の呪いを受けている彼女は、明日のない未来に横たわる死に怯え……穏やかなる死を求めて冬の悪魔を追いかける。老衰以外の死には関わらないと逃げ続ける悪魔だが……
悪魔が触れれば少女は死んで、少女が触れれば悪魔が減ぶ。そんな相殺関係の人と悪魔の恋物語。

『冬の悪魔』 1：冬神の憂鬱

四季を統べるは四人の旅人神。

触れしすべてを凍らせ眠らせるは、忌み嫌われし冬の君。

雪と北風を従えし深き眠りの君は、死操る神。彼を人は冬の悪魔と呼び恐れ敬うが常。されど長らく続く冬の日に、人は恐れを失わん。

愚かな怒りに取り憑かれ……彼をを厭う心ばかりが世界を包む。

そんな俗世に嫌気が差した冬神は、山奥へと身を隠し……孤独に時だけを送る。

老人は子供らに恐れを語る。

“ほら、見てご覧。冬神様の住まう白き森は、夏の日にも白き衣で山を飾るのだ。

森に踏み込んではいけないよ。冬神様は人間嫌いでいらつしやる。冬神様の歌は大気を振るわせ雪を降らせる。彼が触れば人は命を失うよ。彼の怒りを買えば、このまま冬は終わらず終わるのはこの村、この国さ。我らは春を讃えるのではなく、今一度恐れを思い出すべき。それが冬神様の怒りを解く方法なのだ”

それでも怒りに取り憑かれた愚かな人間は、春を讃える祭りの仕度に忙しく、老い先短い老人の戯言など相手にしない。

長い永い冬の国が語る、一人の神のお伽話。

*

冬の悪魔は考える。それは一人の少女のことだ。

「主様、何かお悩みです？うちが相談に乗りますわー」
「てやんでえ！お前に話しても冬の旦那の機嫌は急降下に決まってるんだろ！」

穏やかに笑う長い白髪の少女の名前は雪。その隣にいる枯葉色の髪に鋭い目つきの少年は北風。そのどちらも冬の悪魔に従う忠実な配下。ただし個性が強すぎるのが欠点と言えば欠点。物静かな悪魔の孤独を紛らわせてくれる二人も、時には思考の妨害になり得る存在。

小さく賑やかな従者達の言葉に応える気力も今はない。憂鬱な気分ですぐ吐いた溜息に、二人の従者が気がついた。

「あ、うちの子分がまた一人生まれました」
「お、あつしのもですぞ旦那」

悪魔の憂鬱が雪を呼び、溜息が風を産む。

少女と出会ってからというもの、このように二人の部下が量産されてしまい、そのことでこの付近に暮らす人々から悪魔は更に忌み嫌われる存在となっていた。

「……懲りずにまたやって来たみたいだな」

主語を抜かして物を言っても長い付き合い。二人の従者は主が何を言わんとしているかをすぐに察した。

「それじゃあ僕はここに来られる前に雲隠れすることにしよう。後のことは頼んだよ」

「へい、あつしにお任せを」

「あのー主様」

「なんだい雪？」

「たぶんもう遅いと思います」

雪の言葉に悪魔の顔が蒼白へと変わる。そしてまもなく背後から聞こえる声。荒い息づかい。それに乗って地の底から響いてくるようなそれ。そこから届く亡者の呪いめいたその声。恐る恐る振り返る悪魔が目にしたものは……

「冬の悪魔 ああああああああああああああ
あああああああ」

「ぎゃあ あああああああああああああああああああああ
 あああああああああああああああああああああああああ
 ！ ！ 出た あああああああああああああああああああああ
 あああああああああああああああああああああああああ」

声の主に脅え、木の上に飛び上がり退避する悪魔。その木下で枝が揺れる程蹴りまくる少女が一人。

顔半分を覆つたマフラー。厚手のコートに手袋に鋭いスパイク付きの冬用山歩き用ブーツと言つた完全装備の中からふわふわ揺れる長い金髪だけが彼女が少女なのだと感じさせる要因だ。鬼気迫つたその表情は、少女の方こそ余程残忍な悪魔に見える。そんな獣のよゝうに咆吼を発する少女に脅えた悪魔は木の上でガタガタと震え出す。

「病弱のか弱い乙女がはるばるわざわざ会いに来てやってんのよ！
少しは歓迎しなさいっ！」

「僕は君を呼んでいないっ！」

「は、嬉しい癖に、可愛くないわね。なるほど、冬神だけあってツンドラって奴なのね」

「違うと思う！違うと思うっ！絶対違うからっ！」

「ええい！人里離れたところで一人寂しく暮らしてる貴方が私にと
きめかないわけがないじゃない！薄幸の美少女に迫られて何そんな

「嫌がつてんのよ！」

「普通、薄幸の美少女は自分でそんなこと言わないと思う」

「何ですってええええええええええええええええ！このっ！
このっ！くそがつ！」

「なあ、雪。何時何処の時代なら薄幸の美少女はくそがとか言うんでい……」

「さあ。そないなことに聞かれはつても。うちは精霊さかい、
人さんの言いはることはようわかりまへん」

「まあいいわ！貴方が私を嫌いだって言うのなら私はそれでも全然構わないんだから。ってなわけで冬の悪魔！今日という今日こそ……」

これに続く言葉が逆であればどんなに楽か。悪魔は再び溜息を吐く。

「私を殺しなさいっ！！」

これだ。これだからこの少女は厄介なのだと思魔は思う。

冬神討伐に来るような人間なら返り討ちに遭わせるのも結構。それでもこの少女はわざわざ殺されに来るといふ風変わりな人間。

「だから何回言えば君は理解してくれるんだ？僕は基本老衰以外の死に関わるつもりは微塵もないんだ」

どうやっても助からない。生きていても苦しむだけ。そんな人間を安らかに眠るような死へと誘うのが冬の悪魔の仕事。

痛みのない死を与えることが出来るという言い伝えが一人歩きして、時折悪魔を求めて山へと踏み入る老人がいる。確かにそんな風に自らやって来た者の前には姿を現し、眠らせてやることはある。それでも少女はまだ若い。老人達とは訳が違う。

また心ない人間も居て、わざと老いた親を山へ捨てる者もいる。そういった場合は本人が死にたがっていたら眠らせてやる。どうせ帰っても辛い思いをするだけだ。本人が死にたくない願うのなら、帰り道を開いてやる。

それ以外の死は冬の悪魔とは無関係。山への畏敬を忘れ山に入って遭難するのは自己責任。悪魔に近づきすぎた自分の浅はかさを呪えばいい。この少女だってそうだ。そんなに死にたいのならこんな重装備を止めて来ればいいのにと悪魔は何度も思った。

それでもこの少女がそうしないのは、つまりは本心は死にたくないからなのだろうとも。そんな間違った方向に進んだ思春期特有の死への憧れなどに付き合わされる我が身にもなつて欲しい。

あまりに煩わしいから殺してしまおうかとも思う時もあるけれど、死を司る立場の者として殺しにはルールが必要だと、自らを戒めている。それを破るわけにはいかないと悪魔は思い直した。

「いいかいフィーネ。確かに僕は触れたものを凍らせる……安らかに眠らせることが出来る。それでも僕は子供を殺すような趣味はない」

「爺専婆専つてマニア過ぎるわよ。この老人性愛者！^{クロノフィリア}ここは健全に私を殺しておきなさい」

「君の発言と行動の何処を取ったら君が健全に見えるんだろうな」

またもや続く悪魔の憂鬱溜息に従者達が口を挟んだ。

「おいそこのお嬢、いい加減諦めやがれ。これ以上冬神様をブルーにさせるとお嬢の村が雪で沈みやがらあ」

「もしくは風でお家が倒壊しはったり？」

「そうそう。はっきり言つて君は迷惑なんだ。君が僕の所に来るとこの冬は強まる。いろんな人が困る。僕はもつと嫌われる。負の連鎖だよ」

「それならそうなる前に私を殺せばいいじゃない」

ああ言えばこう言う。自我の強すぎる少女を説得するのは神である彼にも骨の折れる作業だった。神とて万能ではないということだろう。

「それに今日の私はいつもと一味違うのよ！ 見なさい冬の悪魔！ そして平伏が良い！」

「本当、君の方が悪魔って言つか魔王みたいな顔をしているよ」

「我が村に伝わる悪魔大全！この本にはしっかり貴方の弱点も記さ
れていたわ！」

「僕は悪魔じゃなくて神なんだけどなあ……」

したり顔で少女が掲げたのは一冊の本。

「冬の悪魔を殺めることが出来るのは春の女神唯一人。しかしこれには例外がある。条件さえ満たせば冬の悪魔は人が触れることで殺めることが可能となる」……どうよ！何か異論はあつて！？」

「そんなどや顔されても……。まあ確かにそれは概ね正しいけれど」

「なら！私に触られて死にたくないなら私に触れて殺しなさいよ！」

「ねえ、フィーネ。君は自分でそれを言っていておかしいと思わない？」

「え？何が？」

猪突猛进という言葉が相応しい少女は大事なことを見落としていた。

「その後条件について記されてはいないかい？」

「ええと何々？　この条件とは、悪魔が恋した相手に限る」……つて何でもすってええええええええええええええええええええええ

えええ！？」

「わかってもらえたようで何より。ということでお引き取り願おうか」

「うとうとうとうとう、この私としたことがっ！思わぬ所に盲点がつ！」

「それ以前に穴だらけだと思っけどな君の計画」

「くそっ！今日の所はここで諦めてやるわ。感謝するのね！」

少女の捨て台詞に悪魔は息を吐く。今日初めての安堵の息だ。

「それじゃあさようなら……早く木の下から消えてくれない？君が怖くて降りられないんだ」

「嫌よ」

「何で！？」

「まあ、殺して貰うのは二次で、薪拾いの仕事もあったのよ。貴方が私の変わりに籠一杯に薪を拾ってくれるまでここに居座ってる」

「お、鬼いつ！悪魔っ！」

「それは貴方の方でしょ。ほら、さっさと拾わないと日が暮れるわよ」

シートを広げ弁当まで寝転がり、ぼりぼりと菓子まで食べ出した少女相手に、悪魔は涙ながらに思う。薄幸とか美少女とかってどういう意味だっただろうか。

薪など殆ど落ちていない冬山。北風の力を借りて木から枝を分けて貰う作業に移った悪魔を見つめる雪はにやにやと意味深な笑みを浮かべている。

「何を笑ってるんだ君は……？」

「冬の旦那、気づきはりませんか？ヒエムス様はさつきから憂鬱そうで溜息ばかり吐いてはる。それなのに……うちの子分はんがあの子が来てから一人も生まれてはりません」

「言われてみりゃあ……あっしの子分もですぜ」

雪や北風が生まれる憂鬱も溜息が、生まれていたのは少女がここに辿り着く寸前までだと従者が語る。

「何を言っているんだい君たちは」

悪魔は再び溜息を吐く。

確かに孤独は薄れた。それでも悪魔もいい年だ。幼い頃はそれを寂しく思うこともあったような気もするが、長すぎる時の果てを生きていれば孤独の寂しさなど忘れてしまう。騒がしい少女はまるで天災のようだ。泣いても叫いても逃れられない。今となってはあの頃の方が余程マシだったとさえ思う。

「天地が逆さになったって、僕があんな子を好きになるはずがないじゃないか。神を恐れない所か、神に薪拾いまでさせるような人間相手に」

「まあ、それもそうっすね」

「うちの勘違いでしたわー」

『春の女神』 1：春神の恋煩い

四季を統べるは四人の旅人神。

春風のフルートを携えし、慈しみ深き春の君。彼女は緑息吹く花の化身。誰もが彼女の到来を待ち望む、恵みの女神。

引き留める声も程ほどに、春神は旅路を行く。

神は全ての人を平等に慈しむが常。滞在期間は三ヶ月。それ以上同じ土地に留まることは許されぬ。

全てを無くした哀れな幼子。彼は春神に縋り付く。

“夏の戦火と冬の破壊に虐げられた枯れた大地に緑が芽吹くに三ヶ月は早過ぎた。

行かないでください春神様。貴女に見捨てられれば私の民は死に絶える。

次の春を待たずに、私の国は滅んでしまふ。どうか、今暫く……私の国をお守り下さい”

民を思ふ幼き王の優しさに胸を打たれた春神は、神の使命と己の心の狭間で揺れ動く。

嗚呼、神よ。何故我々旅人神に人形を、人の心を与え給うた。

人の心など知らずにいたならば、私が使命を投げ出すことなどなかっただろうに。

すべてを平等に愛すべき神の身分で、春神が愛してしまったのは一人の少年。

春の女神の足は大地に根付き、恵みの春は一つの国へと留まった。常しえに咲く桜の国が語る、一人の神のお伽話。

春の女神は思う。

どうして自分は人の姿を、女の姿をしているのだろう。

自分が罪を犯してしまったのは、おそらくそのせいだ。その自覚がある。

神が人を思う心は慈しみ。それ以上の愛情を抱いてはならない。そしてそれが限られた人間に向かうことが在ってもならない。それが神という存在の存在の大前提。

「ウェール？どうしたんだい、私は何か君の気に障ることでもしてしまった？」

「いいえ……気になさらないください、王」

女神を心配そうに見つめる青年。引き留めるため縋り付いてきた時の彼は、屈まなければ視線も合わせられない程に小さかったと女神は思い出す。

それが今はどうだろう。もしあんな風に抱き付かれたら、自分の方が彼の胸の中に収まってしまう。

（わ、私は何を考えているのかしら……そんな、はしたない）

頬を染めて頭振る女神に、青年は首を傾げる。そんな動作は昔のまま、澄んだ色の目は子供のように素直。

「神様相手にそんなに畏まられても困るよ。私は唯の人間なんだし」「そんなことはありません！キルシエ、貴方は立派な人間です！私がこれまで旅をして見てきたどの国の王よりも貴方は立派な王です」

「あ、やっと名前で呼んでくれた」

「……はあ。私が貴方の育ての親とはいえ、適当な言葉遣いでは周りに示しがつかないでしょう？敢えて神の私が貴方を敬うことで、

周りが貴方をちゃんと敬うようになる」

「私はあんまりそういうのは好きではないんだけど。みんなで仲良くやれたらそれでいいじゃないか。立派な言葉とか身分とか立場とか、そういう壁を作るから人はおかしいな認識を持ってしまうんだよ。みんなで思ったことを話し合って、これからの在り方を考える。そうやって私達は問題を少しずつ乗り越えて来たんじゃないか」

女神自慢の立派な王は、言うなれば立派すぎた。時代が彼に追いついていないのだ。

王政による独裁ばかりが続く世界で、この王が目指しているのは王政、そしてすべての身分の撤廃。王も貴族の農民も、全てが等しい身分の民に。

そんなものを公言すれば、臣下の中にも王の正気を疑う者が出てくる。王の心を理解したとしても、今ある利益を立場を失うことを恐れるのが人間というもの。

「キルシエ……それは確かに昔のように民がほとんどいなかった頃はそれも可能でした。全員で話し合うことも出来ました。それでもこの国は大きくなった。人も増えました。だからみんなの意見を聞いて叶えることは神の私にも出来ませんし、ましてや人である貴方にはもつと難しいことです」

「それでも……それはウェールが私に教えてくれたんだ。君はみんなに優しい人だ。君が来てから……この国は、人は大きく変わったよ。戦争で多くを失った私の民は人を疑い、人を傷付けることを何とも思わないように冷え切った心を持っていた。それでも君が優しく笑って、綺麗な花を沢山咲かせてくれたから……みんなは優しい心を取り戻せたんだ。だから私は君のような王になりたい」

憧れるように女神を見つめる青年の瞳に、女神は僅かに視線を逸らし照れ隠しのように口を尖らせる。

「それでもキルシェ……政務が農作業と花の手入ればかりというのはどうかと思いますよ」

「お花だって麦だって米だって立派な商品だよウェール。食べ物と綺麗な花がそばにあれば私はそれで満足だし、きっと他の人だってそうだよ。食べ物があれば戦争は起こらないし、花があれば心が安らぐ」

「……はあ、みんな貴方みたいな人間ばかりならそうなんでしょうけど、世の中はそんなに簡単ではないんですよ」

強く優しい女神が傍で守り続けてきたせい、この王は人を疑うということも知らない。そんな彼の変わらなさを、女神は時に呆れ……時にそれ以上に愛おしく思う心がある。

この国に留まった頃は本当に幼い子供だった少年も、今では臣下達からやれ嫁をもらえだのやれ世継ぎを作れだの口うるさく言われるような年。再来年辺りが彼の成人の年だろうか。

（……となると私は十年近くもこの場所に留まり続けていると言うことなのね）

この十年で、国は随分豊かになった。復興した。

そろそろ去り時だ。新しく桜が咲く度にそう思う。それでも二本の足が土に根付いてしまったかのように、女神はなかなか王へ別れの言葉を切り出せない。その度に桜はもう散ってしまう。

狂い咲いた花たちは季節を忘れたように咲いては散って、また咲いて……あっちこつちでそんなことが繰り返されているから年がら年中この国は花が咲き誇っているように人の目には映るのだ。

（私がいなくなったら、この人は……）

母のように姉のように……それ以上の愛情を注いで育てた分、女神にとってこの王は強い思い入れがある。神が育てた人の子は、汚れを知らずいつまで経っても純真で……だからこそ女神は彼が心配でならないのだ。

国が豊かになれば、人の心には余裕が出来る。唯生きていくだけ。それ以上の望みを抱く者も出てくる。今日この国で王の座は、この青年の命を脅かすものに変わりつつある。

それでも旅は続けなければ。他の土地の人々が春を待ち望んでいる。それを救うことこそが女神の使命。それは重々承知している。それでも人の心を持つ女神は、どうしてもこの青年を置いていくことが出来ずにいた。

「そうだ、それならあの桜を見に行こう！そろそろ満開だったと思うよ」

「どう話が繋がったらそうなるんですか？」

「ウェールの機嫌が良くないからだよ」

「……貴方は本当に桜が好きですね」

「ああ、勿論だよ。桜は私が一番好きな花だから、何度見ても飽きないんだ。桜はウェールの髪の色みたいに綺麗な色だからね」

無邪気に笑い手を引く人間の顔を、直視できなくなった女神は俯き大地を見つめて歩く。

その足が、散った花弁を踏みつけていく。桜の花弁は命を模っているように女神には見えていた。

こうやって青年に手を引かれ同じ場所を歩く幸せ。その足下で、多くの命を見捨てていることの罪深さ。

（もしも私が人間だったなら……貴方に手を引かれることを、唯々至福と思えるだろうに）

何故自分は神なんて厄介な身分に生まれてしまったのか。女神はどうしようもないことに溜息を吐く。

自分は神で、彼は人間。追い越された背丈が何よりの証。いつか置いて行かれるのだ。それなら置いて行ってもいいはずだ。彼が他の女と添い遂げる所を見ずに済む。彼の死を直視せずに済む。墓石に彼の名前が刻まれるくらいの時が流れてから、またこの国を訪れればいい。そうやって毎年彼の墓の前で一人で花見酒でも一杯飲むのだ。死人相手なら、言うことも許されるだろう思いを墓前に語りかけながら。

（それでも私は……）

振り払えるだろうか。この温かな彼の手を。

「ウェール、君が今日まで私の傍にいてくれたからこの国はここまですべて復興することが出来た。私はそれにとっても感謝している」

「突然どうしたんですかキルシェ……」

一番大きな桜の木。その一体はここが人の世であることを忘れさせるような幻想的な風景を醸し出す。十年前の戦火を免れた奇跡の桜。女神が少年と出会ったのはこの木の下。

その木まで辿り着き、手を放したのは青年だった。

「ううん、突然なんかではないよ。私はずっとそれを君に伝えようとしてきた。それでも今日までそれは叶わなかった」

女神を見つめる青年の瞳はとても優しく……寂しげだ。

「私はとても我が儘な人間なんだと思う。君のようになりたいと思いがながら、そんな風にはなれないんだらうとも私は思う。私は全然

立派な王なんかではないんだ。君と離れたくなくて……もつともらしい言葉を吐いていただけ。それでも私は君のようにになりたい。今からでも間に合うのなら、少しでも君に近づきたい。だから言うんだ」

桜の雨を浴びながら、青年は春の空を見上げ……眩しそうに目を伏せる。

「君には君の使命があるのに私は私の我が儘で君の旅を邪魔してしまった。……でも、それも今日で終わりにしよう。私ももう子供ではない。我が儘が許されるような年でもなくなってしまった」

女神に傍にいて欲しい。そう思うのは自分の我が儘。彼女のようにになりたいのなら、彼女を縛るわけにはいかない。青年の語る言葉を春の女神は驚きと悲しみと……誇りの中で聞いていた。

「これまで君を引き留めてしまった分、君は何年もここへはやって来られないかもしれない。それでも私は花を植えるよ。君が訪ねてくれた日に、私が育てた花で君を迎えたい。ウエル……私は何時でも君の帰りを待っている。何時でも構わない。またここを訪ねて欲しい」

「キルシエ……」

「この国が君の帰る家だなんて思っていないよ。でも、そんな風になれたら素敵だと思う。君の旅の疲れを癒せるような国にしていきたいと私は思っているんだ」

照れくさそうに笑う青年を見て、女神の頬も赤らんだ。それを見て青年は、気恥ずかしさを誤魔化すように片手を女神に突き出してみせる。

「これは……」

「凄いだろっ？あの木の傍から見つかったんだ」

女神に押しつけられたのは、自然が生み出した見事な宝石。桜の花を内に固めた琥珀の首飾り。

「私の代わりに君の旅と一緒に連れて行ってはくれないかい？」

「……………キルシエ、それは……………」

旅の最中に耳にした、琥珀の伝承。それが確かなら、これは……女神はそれが間違いであって欲しいと思いながらも、そうであって欲しいとも感じていた。

「私はこの国を守りたい。けれど王は世襲制ではなくて構わないと思う。みんなを大事に思って守ることが出来る人がいるなら、そういう人に国の運営を譲り渡していてもいい。だから私は君の他の人を娶りたいとは思わない」

「私は常々思うんだ。王も貴族も農民も……そして神もだ。心がある者は皆、自由に誰かを愛する権利があるんじゃないかな。その気持ちに嘘をついても良い結果にはならないし、誰かが悲しい思いをすることになるんだと、私は思う」

すうと息を吸い、青年が一つ一つの言葉を大事そうに吐き出した。

「ウェール、私は君が好きだ。出来ることなら……ずっと君に傍にいて欲しい。でも私はこの国を離れられないし、君には君の役目がある」

女神には世界、王には国という守るべき抱えるべき重荷があった。その鎖のような存在を、煩わしいではなく愛おしいと思える二人だ

からこそ、彼らはその身分にあるのだろう。

「だからせめて……言葉だけでも形だけでも、君と繋がるものが欲しい。そう思うのも私の我が儘……なのだろうけれど、どうかそれだけは許してくれないかな……」

「……………キルシエ、これをどうぞ」

返事の代わりに女神が差し出すは一振りの剣。

夏との戦の際に用いるその剣は、四姉妹の脅威を振り払う。春神は夏神に勝てない定め神ではあるが、勇ましい戦女神は早すぎる夏の到来に逃げることは選ばない。雨期は二人の戦いが招くもの。夏の旅路を遅らせるための時間稼ぎに用いられるのがこの剣。

「これは君の仕事に必要な物だろうか？」

「私の代わりに……私が戻るまで貴方を守ってくれるように残していきます」

女神が司るは春。……そして平和。夏神の配下の戦争が引き起こす災い達を追い返す力となるよう、女神は剣を青年の腕に押しつけた。

「九ヶ月後に、また……」

贈られた首飾りを身に纏い、春の女神は春風のように優しく微笑んだ。

『夏の悪魔』 1：夏神の宿探し

四季を統べるは四人の旅人神。

触れしすべてを燃やし腐らせるは、疫病奏で死の風操る夏の君。

夏の悪魔と呼ばれし彼の傍らで、歌い踊るは四人の従者。四人の従者は四姉妹。決して揃ってはならない四姉妹。

上から殺人、暴力、強奪、戦争。夏神と四姉妹が取りすぎた後には草木も一本残らない。

生き人神の少女を連れた夏の旅路は辛く険しい。旅の最中に一夜の宿を訪ねる彼らを、快く迎える家など世界の何処にあると言うのか。

砂漠の民が語り継ぐ戒めの言葉。

“夏神と出会ったならば、その頼みを断ってはならん。だが、愛想をよくしてもいけない。

宿は貸しても一番悪い部屋に通せ。物置でも構わない。食事は質素に。ただし、旅の食料と水は最高の物を。

これを守れば夏神は礼を言つて立ち去るだろう。

宿を貸さなかった町は、夏神がそのまま通過し全ての人が死に絶えた。それを聞き、夏神をもてなすぎた町は、彼らが留まり続け水が涸れて滅んでしまった”

夏の悪魔が来たぞ！その一言に宿る人の心は残酷なもの。

それは歓迎などではない。戒めを呼びかける声。

忌み嫌われし季節の神は、心を痛め……それでも希望を信じ旅を続ける。

炎を纏った亡国の……物言わぬ骸が語る、一人の神のお伽話。

＊

燃えてしまえ。何もかも。夏の悪魔はそう思う。

人は愚かだ。結局悪魔が居ても、居なくとも……人は争うことを止めないのだ。

死神たる彼を、敬い恐れる気持ちもなくし、悪魔と罵り忌み嫌う。人は愚かだ。四季神が、なぜ人の姿を模るのかを知らないのだ。旅人神が、人の姿で旅をするのは……訴えているから。自分たちにも心というモノが存在するのだと、それを人へと伝えるために。

「大丈夫ですか！？アエスタス様！！」

目を開ければ、一人の少女。破滅の四姉妹、別名慈しみの四姉妹……その次女パクス。彼女が司るは暴力。しかしその暴力が夏の悪魔に向けられることはない。今も心配そうに此方の顔を覗き込む。

「パクスか……問題ない」

木陰に寝かせられている自分に気付き、夏の悪魔は状況を悟る。

灼熱の大地を歩いている内に、倒れてしまったのだろう。夏を司る自分でも、熱さが平気というわけではない。人の形をしていれば、脱水症状にも陥る。しかし……それでも生身の人間達よりはずっとそれに強いはず。

それでも年若い悪魔はまだ、神の力が弱いのだ。だからこのように醜態をさらしてしまうこともある。半人前とはいえ神は神。それで死ぬことはないが、苦しいことには変わりはない。神など死の痛みでも死ねない身体であるだけだ。

「お前達こそ、無理はするな」

悪魔は顔を上げ、三人の姉妹へと呼びかける。

「夏神様ってば、もう大丈夫なんですかあ？」

気遣い半分、嘲笑半分。今居る中では一番幼い少女は三女のハイレインがけたけた笑いでこちらを見る。腰掛けた岩から立ち上がる気配はなく、両の足をパタパタと砂と風と遊ばせていた。彼女が司るは強奪。それでも普段はやる気がない彼女は、その気になるまで何かを奪うことはない。今は砂遊びに夢中のように……その姿は普通の少女そのもの………というには、少々目の色が物騒かもしれないが。

その少女の隣に立っていた女。悪魔の言葉に静かに頭を下げる、礼儀正しい女は長女のエトレイン。司るは殺人ということもあり、ぱつと見は暗殺者のような服装……それに踊り子の服を足して二で割ったような出で立ち。

「ご無理はなさらぬように……ご自愛下さい主様」

もう一人の妹、四女は今ここにはいない。

全員が揃うことを夏の悪魔は恐れていたが、はぐれた一人を案じる気持ちもある。四姉妹は生き人神。生身の人間なのだ。

彼女たちは神の力を与えられてはいるが、その身は神ではない。人にも殺せる存在だ。

彼女たちが足を運んだ場所には司るに相応しい物騒事が現れる。彼女たちの意思ではどうしようもない、天災。生きた疫病神、それが破滅の四姉妹。

彼女たちを殺せば、その力は世界の何処か……別の少女へと移動する。彼女たちは迫害を受け、自らの力と役目を知る。

そんな風にここに集まったのがその内三人。この三人は今いる夏の悪魔の先代から下僕として付き従っている。

夏の悪魔は人には殺せない存在。彼の傍へといれば身の安全は保証される。それどころか、力が増し、不老の存在と化す。しかし、時に生きることになった女はわざとはぐれ……死を選ぶ。司る役目の重さから、三女や……そして四女がはぐれることが多い。四番目の彼女が司るは……戦争だ。

まだ若い夏の悪魔は、四女にまだ会っていない。どこかでまだ生きているのか。それとも、新たな少女に代替わりしているのか。探すべきか、探さぬべきか。判断に迷う。だからもし彼女と巡り会ったら、それは天命なのだと受け入れようと悪魔は思ってた。

「アエスタス様、どちらへ向かって居るんですか？」

隣に座したパクスが地図を広げながらそう尋ねる。

歩き続けた世界の地図。地形はもう頭に入っている。しかし国名はよく変わる。世界情勢をちゃんと把握していなければ、旅の難易度が上がってしまう。悪魔は現在地の傍にオアシスがあることに気づき、今日はそこへ向かうことを決めた。

「いやあ、砂漠の夜は寒いつてのに……不思議な夜だ」

「蒸し暑い……ってほどでもないけどねえ」

オアシスの街の人々はそう囁き合う。

日も落ちたというのに、空気が生温い。小さな太陽が街のどこかにいるかのようだ。

「馬鹿！お前ら夏神様がいらしてるんだよ！」

「夏神様だつて！？そりゃあ大変だ！」

「いんや、えらいこつちゃえらいこつちゃ！」

「長く居座られたら、ここの水が涸れちまう！必要な物資を贈って、さっさと出て行って貰おう！」

「いや、贈りすぎてもいけないぞ！この場所を気に入られて居着かれても困るんだ」

厄介者がやってきたと人々は重いため息。邪険にしても丁重にもてなしてもよくないことが起きてしまうのだから、無理もない。

それでも彼らは神である夏の悪魔が、人と同じ心を持っていることを知らずにいる。おそらく気付くことも、気付こうとすることもないだろう。腫れ物を触れるように人々は悪魔を迎え入れた。

「夏神様あ、これここの人間達から寄越されました」

宿の中に入ってきたハイレインの手には食料。その一歩後ろから現れたエテレインの手には水。

「他にも足りないモノがあったら言ってください、だそうです」

「……………なんかあ、この街気持ち悪い」

ハイレインは顔をしかめてくくくと笑う。

幼い彼女も若い悪魔もその意味をよく知らない。ハイレインは年齢的に知っているだろうが、覚える気がないため忘れているのだろうとは悪魔も思った。

その説明を求めるべく、次女を呼ぶ。

「……………パクス」

「ええとですね、アエスタス様、それにハイレイン？オアシス付近は夏神信仰が残っているの。……大河の傍もそうですね。夏の氾濫があつてこそ、豊かな実りに繋がるんですから。それでここのオアシスには、昔夏神様の機嫌を損ね、滅ぼされた街の言い伝えがありまして……………逆に手厚く持てなして、気に入られやっぱり滅んだ街のお話があつて……………それで」

「なるほど……だからか」

手厚くしすぎても駄目。蔑ろにしても駄目。機嫌を損ねないように、それでも長く留まりたいと思えないように。

宿の主に通された部屋は上等……というより、喧嘩上等と言った方が概ね正しい。倉庫と寝室が一緒くたにされたような、何とも言えない部屋だった。

「ここのベッド最悪……」

「我が儘言っんじゃありませんハイレイン、野宿よりマシでしょう？」

久々のベッドが飛び跳ね甲斐もないスプリングの壊れたモノで、ハイレインは不満顔。小声で「煎餅布団だし」と地の底から呪うような声色の言葉。

「エテレイン、止めておけ。食料は貰えたんだ。十分だろう？ 一夜の宿の礼だ、ここは静かに立ち去ろう」

「嫌ですう……せめて宿のおっちゃんが被害者の輪まわされ事件くらいは発生させないと私の気がすみませんー」

三女の司る者が強奪となってるのは、軟らかい表現に変えているため。奪うのは何でも良い。金でも地位でも身体でも。ここにいる中で一番幼い精神と、ある意味一番物騒な力の持ち主は、機嫌を損ねると面倒だ。

しかし四女はこの比ではないと言う姉らの言葉から、やっぱり会わずに越したことはないのではと悪魔は思い始めていた。

「ハイレイン！ アエスタスがこうおっしやってるのよ！ 解りなさいっ」

「ごつんと思いきり次女が三女へ鉄拳制裁。」

「暴力女ー……夏神様あ、パクスが虐めるー」

ささつと悪魔の背後に隠れる三女に、次女は為す術もない。

「ハイレイン……主様を盾に使うな」

長女もあきれ顔。

彼は死神。居座るだけで人を殺すことも可能だが、彼自身にも殺しの力は授けられている。

夏の悪魔の両の手は、太陽の手。触れたもの全てを乾かし燃やし風化させる、終わりの手。

神とはいえ生き人神の姉妹達も、その手に触れれば命を落とす。しかし背中にその力はない。今この場にこれ以上の盾はない。

「……果物の香りがするな」

渡された物資の中に含まれていたのだろう。見れば人数分の果実が置いてある。

「ハイレイン、俺の分のをやるから機嫌を直せ」

子供は食べ物で釣れ。この若い悪魔が、三女にとってそれが最も有効だと旅の間に学んだことだった。

「夏神様あ！大好きっ！」

あっさり機嫌を直した三女は、そそくさとテーブルへと着き、勝

手に食事を始めてしまった。二人の姉は文句を言い出したが、気にするなと夏の悪魔は促した。三女に続き、自分たちも食卓につき、その傍ら地図で旅の道筋を考える。

「春の女神の現在地がここ。秋の女神がここ。……フォールの奴、また遊んでいるな。速度が遅れている」

「秋神様はあ、お酒好きで足がふらふらだからじゃないですかあ？」

「そうかもな。しかし変だな。あの堅物のウエルまで……速度が遅れている。このままじゃ近いうちに出会すぞ」

「進路を変更なさいますか主様？」

「そうだな、それなら次はこの国が良いんじゃないか？……ここからずっと北西に行ったところに国がある」

「アエスタス様、そちらはヒエムス様の滞在地に近いようですが？」

「問題ない。俺を殺せるのはフォール……秋の女神だけだからな。

冬の悪魔の傍によっても力は拮抗するだけ。確かそうだったな？」

春の女神ウエルに近づきすぎれば、彼女は逃げて、彼女が逃げれば冬の悪魔ヒエムスが逃げる。そうなると秋の女神フォールが逃げてくるので、夏の悪魔のアエスタスも逃げなければならない。

四季は互いに殺し合う力。天敵神の旅とは重ならないよう動く必要が全員にあった。誰かが急げばその分面倒なことになる。

夏の悪魔の場合、春と秋の女神に出会すと、旅のスピードが変わってしまうので……追いつきそうになったときは道から逸れて、二人を避けて旅するのが慣例だった。

「……雪国は、比較的俺たちに優しい。きっと歓迎してくれる。ここより良い宿に泊まれるかも知れないぞハイレイン？」

「行く行く！行きましょお夏神様あ！」

「アエスタス様……」

「主様……」

はしゃく三女。しかし二人の姉は、神妙な面持ち。

「どうかしたかエテレイン？パクス？」

「どうか、ご自覚なさいませ。貴方がお辛いだけです主様」

「私達は、貴方が傷つくところを見たくないんですアエスタス様」

傷つく？その意味を夏の悪魔が理解するまで数秒。

彼女たちは希望を抱くな、夢見るな、現実を見る。悪魔にそう告げていた。

「貴方は旅人神様。貴方が永遠に留まれる場所は何処にもないんです。私達にも……。でも……。私達の居場所は貴方です。貴方がいます。だから私は辛くない。生きていけるんです。私達では、貴方の居場所にはなれませんか？」

寡黙な姉に変わって、二人分の思いを騙る次女。しかし、若い悪魔は信じない。

「パクス……この地図を見る」

ペン先でそこに小さな穴を開け……。彼は長女と次女にそれを見せてやる。

「世界はこんなに広い。そして俺たちはこの穴よりも小さな存在だからまだ出会えないだけだ。こんなに広いんだ。どこかにきつと俺たちが居ても良い場所が見つかるはずだ」

尚も納得しない二人に、悪魔は不敵に笑みかける。

「何も永遠に留まるつもりはない。四季は移ろうもの……旅人神の仕事もある。それでも……」

当てもなく彷徨うのと、帰る場所を持つて旅をするのとは……まるで意味が異なる。今の辛さも土産話となれば弾むだろう。広い世界の上、どこかに帰る場所があれば……続く旅も苦痛ではない。苦痛ではなくなる。悪魔はそう信じていた。

そこまで言われては、二人の女はそれ以上を言えない。誰かの夢を、信じるものをへし折るのは彼にとっても彼女たちにとっても並大抵な作業ではなく……ましてそれが自分たちの崇める相手だったとしたら、強くも言えなくなるだろう。二人は正にそれだった。

『秋の女神』 1：秋神の物思い

四季を統べるは四人の旅人神。

豊かな収穫をもたらすは秋の君。木枯らしの扇で舞い踊る彼女は豊穣司る実りの女神。

秋神の訪れた場所は、緑が一齐に色付き見事な紅色に飾られ、草木は収穫の日が訪れたことを人々へと告げる。その来訪を待ち望む民は多く、彼女の旅は常に宴と祭りが続く。

人の形と心を持った秋神は、気の良い女神。しかし彼女は四人の旅人神の中で最も人間らしく、世界には彼女を語る多くの神話があった。

“秋神様がいらつしやったら宴会じゃ！宴会じゃ！酒は上物！鮭も上物！毎日たらふく食わせてやらつしやい。酒を注ぐのは年若く見目麗しい童子にすると尚良か。秋神様は美しい者に目が無うて、その飲みっぷりを褒められたなら勧められるままにどんどん酒を吞まれでな。秋神様がほろ酔い気分になられたら立派な布団と枕に勧めらつしやい。出立前の宴の日、寝惚け眼の秋神様に時間を聞かれたら日付も昼夜も付けずに答えつしやい。そんだら、その年の実りは例年よりも多くなつがら”

ただしそうやって女神を騙していいのは二日までと人は語り継ぐ。仏の顔も三度まで。それを破れば目覚めた女神の怒りを買い、実りの女神は収穫の死神へと変わる。

信仰と恐れを無くした世界において、実りもたらす女神は人の目にはどう映るのか。留まらせれば永遠の繁栄を約束された秋の君。

舞姫を見守るように咲いた赤すぎる紅葉が語る、一人の神のお伽話。

*

秋の女神は考える。月とはとても良いものだ。

世には花鳥風月という言葉こそあれ、秋の旅路を進む女神にとって無関係のものも多くある。

秋の化身である女神は、花見の宴などには招かれない。彼女が向かえば満開の桜も散らしてしまう。

例えばそれがどれほど美しくとも、雪見酒など恐ろしくて恐ろしくて逃げ出さずにはいられない。それは女神を殺す者の化身なのだから。

共に永遠を旅する伴侶は夜空に浮かぶ、あの名月だけだ。他を羨むより今ある物を愛でる心が女神にはある。だから月見酒ほど美味しい酒を女神は知らない。

「フオール姉様」

ひよこひよこ後ろをついてくる子供は月のように柔らかな金髪。この少女と旅をするようになってから何年経っただろうと女神は考える。

「どうかしました、セレン？」

「何かお悩みことでもお有りですか？」

お酒のお代わりでしたらお注ぎしますよと微笑む少女。

今は宴の席ではない。何と言うことはない旅路の上。秋の夜長の月見酒。だから多生羽目を外して飲んでも構わないと少女は笑う。

そんな少女の旁りに、女神はしみじみと思うことがある。

この子供を連れ出したのは何故だっただろう。何時だったか旅先で出会ったこの子供は泣いていた。

旅は唯でさえ遅れていた。二日までなら目を瞑る延長期間も破ら

れて、愚かな民は女神を一月も誤魔化し留まらせた。怒りのあまり多くを破壊してしまった秋神を、我に返らせたのがその泣き声。

木枯らしに扇がれ傾いた国。熟した果実は毒を生み、人を内側から破壊した。秋神の呪いによってこの幼い子供は両親を亡くしたのだ。そんな子供の世話をする者などそこにはなく……神の怒りを静めるための生け贄として社に捧げられたのだ。

裏と表の紙一重の神とはいえ、秋神も神。平静を取り戻しては人を殺めることなど出来ないし、この惨状を人の自業自得と捨て置けない程度には慈悲深かった。しかし、風の噂で聞いた春神のように一国に留まることは出来ない。実りの季節を待ち望む民は世界中にいるのだ。それでもこの子供を放っておけないなら、共に連れ出す他に道はなかった。

「いえ、何……お前が私の所に来てから、私の寝坊癖が治って助かっていると言ったのですよ」

「それが私のお役目ですもの、当然ですフォー姉様」

恨み言を口にせず、後をついてくる少女に女神は時折苦悩する。そして怒りに支配されることの罪深さを思い知るのだ。

だからこそ歓迎の宴の席でも好物の酒を控えるようにちびちびと飲み、眠らないよう気をつける。それでも眠ってしまった場合、ちゃんとこの少女が女神を起こしてくれる。優しい月に見守られる旅が始まってから、女神の旅が遅れるということとはなくなった。

それはつまり人に騙されることも久しくなくなり、女神が怒りに取り憑かれ収穫を行うこともなくなったということだ。

「セレン、冬神と夏神の進路はどうなってます？」

「ヒエムス様は北国を中心の旅路を。アエスタ様は北上をなさっているようです」

「なるほど。それならヒエムスは南下してくるようになりますね」

春神が停滞している今、一部の地域を除いて世界は春を失っている。故に秋の実りを世界に届けることは大事なこと。

夏神の太陽で雪を溶かして苗を無理矢理発芽させ、入道雲で水をやり、枯らす前に国から消える。それを秋神が踊り狂って無理矢理実りまでこぎ着ける。冬神は予め降雪量を増やすことで夏の乾燥に耐えうるだけの水を確保する。

失われた季節のために、三人の旅人神はその調整のために苦心している。

もつとも二人の悪魔が女神のように思い悩んでそうしているかはわからない。唯単に今の世界は冬神を憂鬱にするような何かがあって、夏神を旅に追い立てる何かがあるだけなのかもしれない。それでも少なくとも秋神である彼女は春神の尻拭いである調節を行っている。それは、同病相憐れむと言ったところか。

（人間なんかは心を碎くなんて、馬鹿な女と笑ったものだけでも……私もあの子のことを笑えなくなってしまった）

旅は道連れ世は情け。そんな言葉が脳裏を駆ける。

旅路に月を見出すまで、唯々続いていく永遠の旅に嫌気が差していた節はある。美味いご馳走も上物の酒も、百年千年繰り返せば舌は麻痺してなんとも味気ない物へと成り下がる。

それでも隣で微笑む月に注がれた酒は、何時口に含んでも新鮮な味わいを女神にもたらず。

幼い頃にひもじい思いをしてきた少女は、旅先での食事の作り手と自然の恵みへの感謝を忘れず祈りを捧げる。信仰の薄れつつある世界の神としては、少女の祈りは心の拠り所であり慰みだ。

そして本当に美味しい美味しいと箸を運ぶ少女を見ると、女神の方もそんな気持ちになってくる。麻痺したはずの味覚が千年前に戻ったようで、祭りも宴も楽しみで……続く繰り返しの旅が女神

の内面にも実り多きものとなる。

そんな思いを知ったからこそ、秋神は春神を哀れむ心を見出した。

神は神として生まれるけれど、神を産むのもまた神で。だから、作られた神は思うのだ。思い悩み生きるのだ。

私を生み出した神は何故人の心を与えたのだろうとは、旅人神の全員が一度は思い悩むこと。旅人神の終焉は、おそらくそんな悩みの先にある。

（ウェールは旅人神の禁忌を犯した。これが上に知られるのも時間の問題。おそらくもう……長くはない）

そうなれば次の春神が生まれるまで世界は本当に春を失う。その時世界は大いに荒れる。

女神はそれを予見して、前もってその対処を施そうとしているのだった。

世界が荒れればこの少女のような子供も大勢生まれる。女神が我を失わずともそれは変わらない。

（子供が泣くのは見たくないのよ）

女神の溜息は冬神とは違い、北風などは起こさない。変わりに女神の長い睫と前髪を、芳醇な酒の香りで微かに揺するだけ。

『冬の悪魔』 2：冬恋する少女の話

北の国に、冬に焦がれる少女が一人。

執拗に冬を追う少女には理由があった。理由もなく人は死など求めない。少女がそうする以上、そこには理由は存在している。

夏の日に、少女が救いを求めるように見つめる先。窓の外に移る夏の景色不釣り合いな白い色。春も夏も秋も解けることない万年雪に飾られた魔の山。冬の悪魔が住まう場所。

冬の悪魔は死神だ。心優しい死神だ。

それでも自分を殺しに来てくれないのは、悪魔が存在していないから？やはりお伽話に過ぎないのだろうか。そんな考えが過ぎることもあるが、それでも少女は確かな証拠もないのに悪魔が存在していることを確信していた。

少女が高熱にうなされる度、祖母が祈る相手は冬の悪魔の人形だ。熱が引いた後感謝するのも冬の悪魔の人形だ。そんな信心深い祖母に看病されて育った少女は、村の誰より冬の悪魔を信じていた。

そんな少女の職が人形師というのも皮肉な話。少女の家が作るのは夏と冬の悪魔の人形。春祭りと秋祭りに用いる処刑用の人形だ。

春神と秋神が雲隠れして数百年。世界は夏と冬という地獄の季節が半年ずつ訪れる場所へと姿を変えた。二人の死神が完全に恐れを失ったのはその頃から。人々は二人の悪魔への怒りを爆発させた。忌み嫌う季節を追い払うべく祭り年々過激となつて、今では村中を首をくくった人形で飾り、祭りの終わりにその全てをバラバラに刻んで燃やすのだ。

祭りの度に村の中央に飾られる祭壇。十字架に括られる悪魔の人形。それが全ての悪魔の親玉人形。最後はその首を刈り、冬の場合は土に埋める。夏の場合は川に流す。

人形の首流れの秋祭りは観光客が一生のトラウマになると言う悲惨な絵。これに腹を立てたのか夏神は何時しか人を呪うようになって

た。夏の子は、夏の悪魔に呪われた生。少女もまた、夏の子だった。生まれながら高熱に苛まれ、常に病を患ったまま生きる。何時終わるとも知れぬ苦しみ。日に当たればすぐに高熱が出て倒れてしまう。共同農地の仕事も出来ない。夏の間はずっと家の中で寝込み続ける。

夏の子は村からは嫌われる。得体の知れない病を煩っているから気味悪がられて人間の友達さえ出来ない。だからいつも傍にいてくれた人形に、少女は強い思い入れがある。

誰からも疎まれる厄介者。死を願われるだけの存在。何のためにあの人形は産み落とされるのか。死ぬために生まれてくる人形。それが幼い日の自分に似ていると思ったから、少女は悪魔を哀れんだ。殺されるだけの人形が可哀想で可哀想で。

ある年の冬の日、処刑用の人形の手を引いて引き摺り……山の中へと逃げ込んだ。そして少女は吹雪の中、鳴り響く鈴の音を聞いたのだ。その夢とも現とも知れない吹雪の中、朦朧とした意識の中出会ったのは美しい声の少年。

意識がもうろうととしていたせいで、姿をはっきりとは覚えていないが、雪のように白い肌が印象的だったことは覚えていた。その死の化身こそが己の救いだ、その日の少女は気付けなかった。幼い子供は人形こそが悪魔だと思い込んでいたのだ。

その少年に連れられ辿った帰り道。村の入り口まで辿り着き、振り返るともういない。

心配して待っていた祖母に、それこそが冬の悪魔なのだと教えられ……少女は冬の悪魔を求めるようになる。

*

（痛いのは嫌。苦しいのは嫌……）

昼寝でも、夜寝でも。瞳を閉じる度に少女は思う。このまま閉じ

た目が開かずに、そのまま眠るように息を引き取れたらとつても素敵。痛みもなく終わることが出来る。それは甘美な誘惑だ。

苦しみの中、祖母から聞かせられたお伽話。冬の悪魔の物語。それを思い出しながら縋るように見つめる白は、突き放すように気高く冷たい。それでも倒れ込んだ雪の上は布団のように柔らかく、優しささえ感じる。

それでもその冬を統べるはずの男がこれだ。半泣き顔で鼻を嚙りながら薪拾いをしている青年の背中には、どうも今まで抱いていた莊嚴なイメージが感じられない。

（まさか冬の悪魔がこんなに格好悪いだなんて、詐欺だわ全く……）

少女の吐き出す白い溜息。それが鼻先の雪を僅かに溶かした。

北国のその村は、家の仕事の他に村の仕事を行う共同体。過酷な環境の中生きるには互いに協力しなければならぬのだと人はこの数百年間で学んだのだ。

夏の日には外を歩くことも出来ない少女が働けるのは冬の日だけ。農作業の出来ない少女が行う仕事は薪拾い。夏の子は体温が高い。常人より寒さに強く、雪道での仕事も人より得意ではあった。冬が廻ってくる度に、割り当てられた仕事をこなしながら、少女は森を目指した。麓からはよく見える悪魔の森も、山に登れば在処を見失う。

そんなことを続けた結果、少女は再び遭難をした。最悪死ぬなら死んだでそれはそれで構わないと腹を括ってはいたが、せつかく集めた薪を家に届けられないのは腹立たしい。そのことで父と母が嫌味な村長達に文句を言われないうか。それだけが心残りだった。苛々としながら灰色雲に覆われた冬の空を見上げてどのくらい時間が過ぎただろう。そこにやって来たのは一人の青年。

彼が探し求めた冬神なのだと少女はすぐに気がついた。その理由

は簡単。見るからに。

第一そんな人間を少女は知らない。

青年の髪は不思議な色。雪のように真っ白な白髪に透き通った水面に、水色を数滴混ぜたような青のグラデーションの髪。瞳は氷張りの湖の色。彼の耳は尖っていて、頭からは羊のような角が生えている。低血圧なのか常に眠たそうな顔をしているが、見た目は整っている。冬を司る者の癖に寒いのだろうか？厚手のコートを着ているその悪魔。

悪魔は少女に近づいて、まだ息があることを察すると……伸ばした腕を引っ込める。そして少女から離れる。それでもすぐ傍に誘われるように少女が起き上がれば、更に数歩離れる。それを追えば更に数歩離れる。本で読んだ通りだ。悪魔はこうやって村まで遭難者を帰すのだ。しかし少女は村に帰るつもりなど毛頭無かった。

あろう事が悪魔の名を呼びながら全力疾走してくる少女の迫力に、悪魔は驚き木の上へと逃げ出した。朦朧とした意識の遭難者は、夢か現かわからぬまま帰還するものだというのに、こんな人間初めてだと悪魔はとても怖がった。

怒らせても怖がらせても構わない。少女は悪魔に殺して貰いに来たのだから。相手が神だというのに我ながら不遜なことをしたものだと自分の行動を少女は省みる。

しかしあれは相手も悪い。神という者が、あんなにも人間みたいな反応をするとは思わなかったのだ。神ならば神らしく傲慢に踏ん返り返って我が儘であるべきだ。人間なんかに脅える神がどこの世界にいるだろう。

（今日もまた、殺して貰えなかったわ……）

籠いっぱいに詰められた薪を背負いながら少女は山を下る。

意外とあの悪魔は頭が固い。気が弱い割りになかなか折れない。もう一歩だと思っのになかなか殺して貰えないのだ。

吸い込む息はとても冷たく、吐き出す息は真つ白だけれど、少女はこの空気が好きだった。冬の空気は冷たく、身体の熱を冷ましてくれる。こんな風に思いきり動くことが出来るのは、この土地が冬に支配されているからだ。

「ただいま！」

「あらフィーネ、凄いわこんなにどこから拾ってきたの？」

「あら母さん、私だってやるときはやるのよ」

胸を張って荷物を下ろせば母が寒かったでしょうと頭の雪を払ってくれる。

「半分が村に収める奴で、残り半分がうちの奴。これだけあればしばらくは大丈夫よね」

「そうね。これだけあればしばらくはお役目は来ないと思うわ」

それを確認して少女は小さくガツポーズ。自由な時間を手に入れた。これであの氷頭の悪魔を口説き落とすことが出来る……かも
しない。

「そつだ母さん、発注の人形はあと何体だったっけ？」

作業場兼自室への階段を上りながら、少女は母を振り返る。

「今年も祭りは大々的に。人形も増やすっていうから、多ければ多いほどいいみたいだわ」

「稼ぎ時ね」

不敵な笑みを浮かべる少女に母親は心配そうな声を上げるが、少女は笑みを崩さない。

「でもフィーネ、あまり無理は……疲れたでしょう？今日はもう休みなさい」

「嫌よ。ここで稼がないでいつ稼ぐのよ。私の人形は出来が良いってよく売れるじゃない」

少女はそのまま階段を駆け上がり、自室の扉に手を掛ける。その取っ手の冷たさを感じられるのは、高すぎる体温のため。

（そうよ……今年が最後かもしれない）

次の夏を越せるという確証はない。父と母のためにも稼げる内に稼いでおきたいのだ。

『春の女神』 2：桜に魅せられた王の話

春が恋の季節だとは誰の言葉だったろう。

戦争により傾いた国の草木は実りの秋すら通り過ぎる。秋が訪れても春がなければ意味がない。芽がなければ燃やされ失った実を結べる花はない。種を蒔いても冬の下では凍えてしまう。

傾いた国は穴の開いた船のよう。逃れることは出来ない。ぽっかりとその穴に飲み込まれていくのを、唯待ち続ける。後は沈むだけなのに、人はその穴に狂わされる。

お終いの穴。飲み込まれたらお終い。

みんな自分のことばかり。戦争は終わったのに人々は四姉妹の歌から目を覚ませない。生きるために奪い、苛立ちのために奪う。奪うために力を振るう。力を振るい、人を殺してしまふ。そんな景色を少年は見つめていた。

城は戦争により壊された。父も母も部下達も、みんなみんな……もういない。僅かに残った残虐な悪鬼のような民が幾らか。それが彼の民。そんな終わりの国。そこが彼の家。冬のすきま風は彼の心と涙を凍らせた。

四姉妹が率いる人間達が、国から彼から多くを奪った。食料も金銀財宝も、もう城にはないのだ。

国で一番古く、一番大きな桜の木。この木は戦争からも免れた。生命力に溢れた木だ。そんな木さえ花を結ばない。

せめて死ぬ前にもう一度、この木の花を見てみたい。少年はそう思った。

それが叶わないのなら、せめてこの木の一部になれば素敵。国を見渡せる小高い丘の上。その根元に座り、ひざを抱えてじっとしていた。そうしていたら段々眠たくなった。お腹が空いていたことも段々忘れていった。はつきりとしらない意識では、枝の上に積もった雪が桜の花のように見えてきた。春が訪れたのだろうか。

そう思った瞬間、凍った涙が溶け出して桜の木の下で泣いていた。取り戻した意識の下で知るはやはり幻。それは雪だった。それが分かって、また泣いた。

耳に届くのは誰かの悲鳴と笑い声。今日はそこまで寒くなかったから、自然に食料が生まれなかったのだろう。守らなければならぬ民が僅かな食料を巡って奪い合っている。それは本当に食べられるもの？食べてもいいもの？わからない。その内自分も食べられてしまうのだろうか。王の権威なんてもうないに等しい。国を守れなかった王……その世継ぎ。それは唯の子供だ。唯の柔らかな肉だ。人々が少年を王子ではなく肉と見る目が変わってしまったえば、その日が自分の命日。その日に悲鳴を上げるのは自分なのだろうと少年はなんとなく確信していた。或いは、木の根や木の皮を食べるのにも疲れたら……寒さに負けてそのまま動かなくなったなら。そうなくても運ばれていくのは自分だろう。

それでも父亡き今……自分が王ならば、進んで彼らの元に向かうべきだろうか。王の子供の癖に、幼い自分は何も守れなかったのだ……守って貰うばかりで。

せめて彼らを空腹と死から一日でも守ることが出来るのなら、それは素晴らしいことかもしれない。そしてそれが償いなのかもしれない。

そう思う心はある。それでも足は竦む。身体は震える。物心ついたときにはもう戦争の中にいた。死を見て育った少年は、日常の至る所にありふれている……その死がとても恐ろしかったのだ。

何の因果か。人の罪をむざむざと見せつけられるようにして育った。夏と冬の戦場となった国に生まれて、悲しみばかりが降り注ぐ毎日。

けれどどうしたことだろう。今日の雨は色付いている。真っ白な雨でも真っ赤な雨でもない。今日の雨はその中間。

幻聴だろうか。噉り泣く少年の耳に届いた軽やかな笛の音。

幻覚だろうか。白い雪に彩られた木々が薄桃色に染まっていた。

少年の佇む木の下に、近づいてくるのは一人の少女。

少女は銀色の甲冑に身を包んだ姿をしている。それは物語の中で読んだ戦女神のような荘厳さ。少女の髪は色付いたばかりの桜のような、柔らかな桜色。雪がうつすら頬を染めたような白と桃色の中間色。

その美しい人に魅入られたように、少年はぼうつと旅人を見つめていた。

少女の唇が微かに震え、そこから吹き込まれた息がフルートを歌わせる。春の歌が国中に響き渡り……色を失った国に色とりどりの草花が咲き乱れる。それを聞きつけ戻ってくる鳥や獣たち。

それは魔法のようだった。廃墟同然の国が、自然の美しさをあつという間に取り戻したのだから。

「あら……貴方は？」

演奏を終え、一仕事を終えたように息を吐いた少女は、ようやく木の下に蹲った小さな子供の姿に気付く。

「……………キルシエ」

尋ねられ口から転がり出たのは自分の名前。いきなりお前は何かと尋ねられ、自身の本質を語れるような人間はまずいない。だからそれは至極普通の解だろう。

「その名は耳にしたことがあります。確かこの国のお世継ぎ様でしたね」

少女はその返答から何かを思い出すように頷いた。

「王子様、あまり男の子が人前で泣くものではありませんよ」

ずると鼻を噉ったままの少年に……口調は何処か厳しく、それでも優しさを感じさせる慈しみ深い瞳で少女が微笑む。

「……………女の子なら、泣いて良いの？」

「そういうものでもありませんけれど」

「お姉さんも、泣いたりするの……？」

「私は滅多なことでは泣きません。私は春の女神ですもの」

それは理由になっっているのかどうなのか。少年はわからなかったが、力強く微笑む少女の言葉には説得力があった。

確かに戦女神が泣いてばかりでは、なんだか格好悪いというか絵にならない。自分が泣くのは自分が弱いからだ。それならこの少女はとても強い人なのだろう。

それでもわかる。この人は強いだけではなく、優しい人。

「それでも貴方はまだ子供ですから、泣くのもいいでしょう。私がここにいる間は私が貴方を守って差し上げましょう」

不意に撫でられた髪。触るその手は温かく、とてもやさしい手つきだった。

「これまで辛かったでしょう。おかわいそうに……まあ！ 凄い霜焼けじゃない……すぐに手当をしなければ！」

*

美しい女神が現れて、女神がルールを敷いた後……民が奪い合うようなことはなくなった。

女神は神だ。神は強く気高く清く正しい。

腹が膨れれば終わりの穴も狂気も影を潜める。女神の説く言葉に人々は諭され、踏み外した道を引き返し、再び人間らしい生き方をすることが出来るようになった。

それでも少年の胸の内にはぽっかりと開いた穴がある。極端な人の表と裏を見て育ったから、不意に不安になることがある。人の本質とはどんなものなのだろう。

青年となった少年は一人思い悩む。

悪魔の季節に冒された人々は、恐ろしいことを平気でやってのける。それでも暖かで優しい春の息吹に包まれて、人々の心は和らいだ。その姿こそ人の本質なのだと信じたい。それでもそれが春の作り出した仮初めの平和なら……彼女が去った後に、この国の民はどう変わってしまうのだろうか。

その不安の穴を塞いでいてくれたのが、傍にいてくれた女神。彼女が消えたことで、王の中に不安が舞い戻ってくる。

「私は人間だから……ウエールのようにはいかないだろうな」

長く支えてきてくれた伴侶の旅路を祝い、その背中を見送った。申し出を受け入れてくれた彼女のためにも、自分は自分の仕事をきちんと行わなければならない。

彼女が残した剣を握りしめ、王は気を奮い立たせる。辛く厳しい季節を乗り越えてこそ、春の喜びを知ることが出来るのだ。

春が恋の季節だと言ったのは誰の言葉か。

あの日、心の冬を溶かしてくれた女神に出会い、幼き王は春を知ったのだ。

またあの春に巡り会うことを心待ちに、畑に水をやる。春が過ぎれば夏の旅人が現れる。過ちは繰り返してはならない。そう強く念じた時だった。

「キルシエ様！夏神様が……っ」

駆け寄る複数の足音。脅えたような配下の声に、青年は腰を上げて作業を中断。

「私が行こう」

「しかし……」

洪る配下を宥め、王は足を急がせる。

国を治める上では自然との関わりの大切なこと。その化身である旅人神と上手くやっていくことこそが王の役目だと彼は考える。

「父は彼を拒んだからあんなことになったんだ。私はウェールに出会って気がついた。神もまた心を持った存在で、心を通わすことが出来る存在なのだ」と

春神に育てられた王は、多くを知っていた。

「私はウェール同様、夏神を客人として迎え入れる。秋神も、冬神もだ」

そして同時に、多くを知らなかったのだ。

『夏の悪魔』 2：夏を迎えた男の話

「あはははは！こんなの初めてっ！！」

はしやぎまわるハイレイン。

「でもこの国の名前聞いたことがあるわ。先代様と私達……それにベルルムが揃った場所じゃなかった？」

「ああ……何か思うところがあったのか」

首を傾げるパクスの言葉に頷くエテレイン。

旅路の途中で尋ねた国は、北と南の狭間に位置する。四季神の影響を受けやすい気候の国だった。

今度はどんな物置小屋に通される物かと思いきや、出迎えたのは優しい笑みを湛えた若者。聞けば彼がこの国の王だという。

他国の長のように宝石を鑲めた金細工の王冠ではなく、その辺りで摘んだような花冠を乗せた彼は、子供のように無邪気に見えた。

その幼さを感じさせる雰囲気から少年かと思ったが、次の年にはもう成人する年だとか。形容するなら青年に属する部類だろう。

そんな若い王に通された部屋は一級品。国の風土を残した長閑さを感じさせる造りではあるが、傲らない豪華さがそこにはある。自然の持った美しさを十二分に引き出した調度品達は心安らぐ匂いにする。窓の外の景色も見事なものだ。夏が訪れたというのにその景觀を失わない何かがある。

穏やかに迎えられたからだろうか。悪魔の心も穏やかで、夏の日差しも適度の熱さ。じつとりと張り付くような汗ではなく、心地良い汗を生み出す熱だ。

「夏神様、つまらないものですが私が育てた花です。よろしければ

「こちらをどうぞ」

優しく微笑む青年に手渡されたのは見事な花束。夏の旅路では出会ったこともないようなその花に、悪魔は軽い感動を味わう。

「あ……」

感動のあまり思わずその花に手を触れて……悪魔は思い出す。
悪魔が触れた物はこうなる定めだ。枯らしてしまった花を見て、
気まずそうに顔を背ける夏の悪魔。

「……………すまない」

「いえ、構いません」

しかし王は気にせず笑っている。悪魔の手から返されたそれを、
王は一礼して部屋へと飾り付けて振り返る。鼻孔を擽る華やいた香
りはまだ、そこにある。

「夏神様はドライフラワーというものをご存知ですか？これもなか
なか趣があって私は好きです」

「王様はあー、お花なら何でもいいんじゃないですかあ？あははは
は！」

「……………ははは、そうかもしれないな」

旅の一行の中で一番残忍な三女と共に笑い合う優しい王。一番
馬が合わないような組み合わせだけに悪魔も開いた口が塞がらない。

「あのハイレインと会話が出来るとは人間がいるとは…………」

「あの男、ただ者じゃありませんね」

長女次女の姉二人も、風変わりな王に驚いている。

「夏神様、それに素敵なお嬢さん方、今宵は歓迎の宴になります。その料理の他に何か食べたいものや、何か苦手な物はございますか？」

「果物！生果物っ！干し果実はもう飽きたのー！」

「す、素敵だなんてそんな……って私にはアエスタス様という方がいらっしやるのに私ったらもう……」

「……………褒めても何も出ないぞ」

三者三様、姉妹達が顔を赤らめる。三女だけは自身の司る物も忘れたように食欲が優先されていそうだったが。

「……………王、何故そこまでよくしてくれるんだ？」

ここまで歓迎されたことはない。そのためよくしてもらいすぎていることが、逆に不安で信用ならない。王の好意は有り難いと思いつつも、警戒心を完全に解くことが出来ない悪魔は王に問いかける。

「聞いたことくらいはないか？あまり夏の悪魔をもてなしすぎると居座られて国が減ぶと」

それに王はあるともないとも答えずに、花の名前を持ち出した。

「春には桜。夏には朝顔。向日葵もいいですね。秋には藤、そして紅葉。冬には梅と椿でしょうか」

「……………何をおっしゃっているのだ？」

「夏神様、四季には四季折々の風物詩がございます。花も同様。どんな季節にも花は咲きます。そのどれが一番素晴らしいかと聞くの

は愚かなことでしょう。全ての花に花言葉があるように、意味のない花などこの世にはありません」

忌み嫌われるべき季節など一つもないのだと王が言う。夏の暑さも花を育てるためには必要なのだと。夏の厳しさは意味のないものでは決してない。

それは忌み嫌われてきた夏の悪魔が人間に……初めて肯定された瞬間だった。

「私は長らく春と共に生きました。故に他の季節を知りません。私の民もそうです。ですから我々は夏神様方にも感謝しているのです。よくぞこの国へ立ち寄ってくださった」

悪魔はようやく理解した。春神に育てられたから、この王は人間らしくないのだ。

神を神として恐れ崇めるのではなく、敬いつつも同じ視線で接する、心通わせる存在としてこれまで彼は春神と仲良くやってきたのだろう。だからこの地を訪れる他の神々とも、同じ風に接していきたいと願っているのか。

「春神の旅立ちの日に植えた夏の花の種が次々に芽吹いて葉を茂らせる。……これまで見たこともない花達に、我々は感動しています。ありがとうございます夏神様」

「……俺はアエスタス。そう呼んでくれても構わない」

四神を平等にもてなすというのなら、まずその敬語をやめて貰おうかと悪魔が許しの言葉を口にする。

「ありがとう、アエスタス！」

握手を求め身を乗り出した王に、さつと悪魔が身をかわす。急に避けられた王は勢い余って転んでしまう。

「俺は女神とは違うんだ。気をつける」

「え？」

「残念！握手してたら今頃王様形死体完成してたのに」

面倒な両手のせいで助け起こすことも出来ないと、肩をすくめる悪魔の傍でけたけた笑うハイレイン。

説明不足すぎる上に物騒な物言いに疑問符を浮かべる王。それを見かねた姉二人が三女の言葉を補足する。

「主様……つまりは夏神、それから冬神の手は危険だと記憶しておけ、王」

「アエスタス様の御手は水分を奪って乾燥させる。ヒエムス様の御手は温度を奪って冷やしてしまう。これは本人が意識しなくても行ってしまう力です。アエスタス様が意識して触れれば燃やせるし、ヒエムスなら凍らせることが出来るという話なんですよ」

「へえ……大変なんだなあ」

怖がるどころか驚いたような感心したような王の声は、春の日溜まりのように長閑なものだ。

「それじゃあ食事はどうするんだい？」

「それは私達が」

「はい、夏神様あ！あーんって！」

「なるほど」

「最悪犬猫のように手を使わずに食べるという方法もある」

「だから口移しても問題ないんですよねえ夏神様あ？」

「こらっ！ハイレインっ！」

「暴力反対いー……」

「あはははは」

三姉妹と悪魔のやりとり、若い王は腹を抱えて笑い出す。それに驚き茶番を中断する悪魔と姉妹。

「神を笑うとはなんとも恐れ知らずな人間もいたものだ」

「あ、いやごめん。つい……」

王の謝罪に悪魔は無言を貫くが、歪みそうになる口元を必死に抑えて仏頂面を守ろうとする意地とプライドの水面下というか顔面下の戦いが繰り広げられていた。

（だが、悪くないものだ）

人間に、まるで人間のように平等に扱われる。それは神のプライドを逆撫でする行為にもなり得ること。それでも旅人神は神の身分でありながら、神というより心は人間寄りの生き物だ。だからこそその扱いをありがたく感じる心が悪魔の中にはあるのだろう。

迎え入れられること。受け入れられること。こんな国は初めてだ。若すぎる王は、ただの一度も自分から出て行けと悪魔に語ることはなかった。それでも居座るのは迷惑だろう。家臣達は時折何やら言い足そうに此方を見ていることがある。

それでも若い王は、ゆっくりして行けと口癖のようにそう言うのだ。旅支度をはじめると、毎回王はそう言った。この国がどうなのかはわからない。それでも少なくとも彼一人は、夏の一行を歓迎してくれている。心の底から。それを素直に信じられるようになるまでの間、王が悪魔を追いつことはなかった。

そんな不思議な王と夏の悪魔が友人と呼べる関係になるまで、そこまで時間は掛からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0056k/>

冬の悪魔

2011年4月14日18時35分発行